

構成員からの主な御意見

1 気象状況や生産技術動向等からみた今年の作柄への影響及びその見方

全国的に顕著な高温が続き、夏（6～8月）の気温は西日本、沖縄・奄美で1946年の統計開始以降で1位、東日本では1位タイの高温となった。日最高気温が35℃以上となる猛暑日の夏期間の合計の地点数は、昨年や2018年、2010年などの過去の主な高温年を上回っている。夏期間の猛暑日となった日数を地域別にみると、北日本や北陸地方では昨年に及ばない地点が多いが、西日本では昨年を上回る地点が多い。8月15日以降も多くの地点で猛暑日を観測するなど厳しい暑さが続いていることや最新の1か月予報等で今後も全国的な高温が予報されている。

東・西日本の6月上旬・中旬の日照時間は平年を上回ったが、梅雨前線が北上し本州付近に停滞することが多かった6月下旬には西日本の日照時間はかなり少なくなった。7月下旬は、北日本各地で大雨となり、特に北日本日本海側では7月下旬の降水量が1946年の統計開始以降で2位の多雨となった。

全国的に田植～出穂期まで高温・多照で推移し、概ね順調に生育したと判断される。5月の移植では、5月下旬にやや気温が低めで降水量が多くなった地域があったものの大過なく、その後概ね高温多日照で経過し生育は順調に進んだと判断される。6月以降の高温・多照条件により、全般に分げつは旺盛で収数確保がなされたものと推察される。

北陸など日本海側では、今年は6月に高温、多照で推移しており、降水量は平年よりやや多く推移している。こうした気象条件が、分げつ数、穂数、出穂期に及ぼす影響を移植時期、品種等の違いを考慮し、注視していく必要がある。

九州などの遅場の地域で、田植え期以降6月下旬から非常に寡照となった期間があり、分げつ数や草丈、収数確保への影響が懸念される。

高温傾向で出穂期が早まっていることに加えて、7～8月にわたって昨年同様の高温が継続しているため、幅広い作期や品種で登熟気温が高くなり、一部地域で白未熟や胴割れなどによる品質低下の懸念がある。このような状況は、特に平均気温の平年差が大きい地域で顕著になると推察される。また、生育期間が短くなることや、高夜温に起因した稲体の消耗による収量への影響が懸念される。

今後、日照時間が平年並みか多いと予測されている地域では、登熟は良好であると考えられるが、全国的に8月以降も平年より高温となると予想されており、一部地域で白未熟粒や胴割れ粒の増大による品質低下の可能性が懸念される。9月以降も高温、多雨傾向の予報であり、今年は台風の発生も多く、秋雨前線の影響で不安定と予測されており、出穂期以降の登熟への影響が懸念される。

昨年の高温による品質低下により、全国的に高温耐性品種への置き換えが進んでいると推察され、その効果が注視される。

高温が作柄に及ぼす影響は千粒重の低下、不稔粒の増加、収量の低下、等外格付けによる収量低下が報告されているが、高温は多照を伴う場合が多く、高温が収量に及ぼす影響は明確ではない。

高温で登熟が進行すると、収穫期が早まると予想される。高温のため生育が進んで出穂期が早まっている地域が多く、収穫適期の判断に留意する必要がある。

梅雨前線の停滞や8月中旬の台風第7号、8月下旬の台風第10号などによる降水量の増加や線状降水帯の発生による豪雨があり、冠水や倒伏により登熟や品質、収穫への影響などが懸念される。9月以降も台風の影響が予測され、今後の台風の発生状況に注意する必要がある。

ほぼ全国的に斑点米カメムシ類の発生が多いと予測されており、外観品質への影響が懸念される。

構成員からの主な御意見

2 予想収穫量(9月25日現在)調査の実施に当たっての留意事項

地域や品種により影響は異なるが、6月以降の高温・多照により分けつが増える面がある一方で、栄養生長から生殖生長への切り替わりが早まり分けつ数やもみ数が確保できないといった面もあるため両面から留意する必要がある。

7～8月は全国的に高温傾向であり、平均気温の平年差が顕著な地域における品質低下への影響に留意する必要がある。出穂開花期に猛暑となった地域における不稔発生や高夜温に起因した稲体の消耗に留意する必要がある。

高温不稔については、開花時に穂温が33度程度を超えると不稔になるとの研究結果がある。国内では開花時の穂温が33度となる日の日最高気温が35度程度であることから、日最高気温35度を目安とする場合が多いが、気温と穂温は必ずしも同じではなく、特に高湿度条件で穂温が上がりやすい傾向があることから、今後は高湿度などの気温以外の気象要素にも留意する必要がある。

7月以降の豪雨や8月以降の台風などによる倒伏や冠水が、収量や登熟、品質に及ぼす影響に留意が必要。

フェーンが発生した地域など局地的な気象条件の影響について留意する必要がある。

高温傾向で班点米カメムシ類の発生が多いと予測される地域が多く、収量・品質への影響が懸念され、発生や防除実施状況に留意する必要がある。

構成員からの主な御意見

3 その他(本年の生育・作柄で特徴的な事柄等)

本年の夏季の高温は昨年度と同等のレベルであり、このような気象条件の継続の可能性について注視する必要がある。また、気候変動条件下での安定生産に向け、高温耐性品種への転換と更なる耐性品種の育成を進める必要がある。

高温耐性品種の作付けが拡大していると思うが、今後、品質への影響とともに、収量への影響も注視する必要がある。

全国的に顕著な高温傾向が続いているが、昨年と今年の顕著な高温は気候変動による温暖化だけが原因ではなく、今年の春に終息したエルニーニョ現象などの自然変動の影響が大きいことから、毎年続くものとは限らない。ただ、今後も温暖化の傾向はしばらく続くことと見込まれることから極端な高温はこれまでよりも起こりやすくなると考えられる。